

日本語教育における学習者の自己相対化について

- 私のことばの肉化とアイデンティティーの獲得 -

蛇拔優子

1. はじめに
2. 「問題発見解決学習」での学習者Pの自己相対化
 - 2 - 1. 本稿の目的とデータ
 - 2 - 2. レポートの下書きを追っての分析方法
 - 2 - 3. 5月31日から6月21日へ
 - 2 - 4. 結論
3. おわりに

1. はじめに

「相対化」ということばは「絶対化」に対応する二項対立的な観念表現であつたろう。そこから推測すると物事の本質を「 $\circ \circ$ は $\times \times$ である」と定義することから始まることばの概念化だけではそのことばの本質を表現することは不可能であるということへの反省の末に生み出された表現と考えられる。すなわち相対化するとは絶対化しないことである。

では絶対化しないとはどういうことなのか。それは一義的に物事の本質を規定なり定義なりしないことであり、そのためにはいろいろな視点からの見方、考え方、発想の仕方をもって思考の対象に迫るということであろう。ではそこに自己がつく「自己相対化」とはどうなるのか。それは、「自己」という思考の対象の本質を探究する際に、ある一方向からの視点からだけでなく多くの視点から見、評価する、判断する、分析するといったことを意味すると考えられる。

次になぜその「自己相対化」が日本語教育で必要なのであろうか。筆者は「ことば」

の意味とは一律的，一義的ではないという視点に立つ。「ことば」は「主体」における「意味」の「確信成立の構造」として把握されるべきこと」（竹田 2001 p.128）ということであるとすれば，この立場で言語教育を考えるとことばの習得とはことばの使い手である「主体」の「私」が，使用することばの「意味」づけをして，そこに「私の確信のほど」を形成することになるはずである。この「意味」づけの際に人は認識という精神作用を働かすのであり，「私の確信のほど」はその精神作用の活性化によってしか高まらないのである。その高まりが「私」に充足感を満たす時，「そのことばは私にとって肉化する」と言えよう。即ち「私のことば」の誕生である。そしてこの充足感の獲得は「自分とは何か」の問いの一時的ではあるが，答えとなり得るものなのである。この答え探しのための一連の思考が「自己相対化」と称されるべきものである。そして「自己相対化」ができるとは，そのプロセスから導かれる答え発見までの形成過程を記述化することで自分が何者であるかを知ることにある。これは教育の根本理由であり，自己実現のための「私のことばの肉化」はその自己認識過程で達成されると筆者は考える。ゆえに「自己相対化」は言語教育である日本語教育に不可欠なのである。

2. 「問題発見解決学習」²⁰での学習者Pの自己相対化

2 - 1. 本稿の目的とデータ

「私のことばの肉化」のための「自己相対化」という思考を遍く自己実現の現場である教育の場で顧慮する必要性を論じるのがこの論文の目的である。そのためにデータ分析から日本語教育での「自己相対化」のプロセスを経てアイデンティティ獲得の実際を見ていくのであるが，その分析対象者に筆者はPという 35 歳で二児の母という属性の学習者を選定した。その理由はPのレポートの変遷から「自己相対化」のプロセスが非常にはっきりした形で表れているからである。それはこの「問題発見解決学習」での活動の記録からP自身の素材としての「自己相対化」への指向度の高さとクラスダイナミクスが如何なく発揮されている²¹ことが観察されたこと，それと教室活動最終日での相

²⁰ 日本語教育におけるコミュニケーション能力育成のための言語活動をその内容に鑑みて命名されたもの（細川 2002 参照）

²¹ ここで「クラスダイナミクス」とは「問題発見解決学習」でのレポート作成過程における活動全参加者による相互的なことばでのやりとりを含めた活動内容全てを指し、それは学習者のレポートの変遷上ばかりでなく授業記録からも窺えるものである。

互自己評価²²でPは高い評価を得たことで、この学習の有効性が顕著であることによる。また昨今、年少者の日本語教育が取り沙汰されているが²³、人間の自己実現に向けての成長は年少者のみならず、すでに社会の責任ある構成員として日々を暮らしている大人にも欠かせないものであろう。それは「自分とは何か？」という問題意識を自覚し考える対象とすることは哲学という学問範疇²⁴に迫いやられ、多くの成人がほとんど向き合うことなく現在まできてしまったというのが実情であり、その問いへの答えを探究することなくして人は自己実現に通じる幸福感や生きがい感を会得できないと筆者は考えるからである。人間関係性の中から人は育っていくという当たり前の原理を確認するうえでもこの「自己相対化」は「大人」にこそ必要な思考であると考え次第である。筆者はPという人物が子供を通して自分の問題意識を見つけそこから「私のことば」を肉化させ自分のアイデンティティーを探求していく過程に共感を覚えるとともに、この学習が遍く日本語教育分野での妥当性を持つことを論証する。

2 - 2 . レポートの下書きを追っての分析方法について

前節で明示したようにこの論文のテーマである「自己相対化」を論証していくために、筆者は分析データとして早稲田大学日本語教育センター2001 年度春期「総合5AB」（担当：細川）に関する授業記録とPのレポートの下書きと最終原稿を用いる。そして分析はPの思考の変遷をそのレポートの下書きでの毎回の变遷並びに授業でのPの発言から探っていくために膨大な量のデータ引用と記述となった。しかし今回のこの小論では下書きの一過程を提示してそこでの变遷について「自己相対化」の有無を考察していきたい。その变遷は一部であっても「自己相対化」の何たるかを示す主要要素となり得るので、そこから導かれる結論に遜色はないと考える。（引用するPのレポートの下書きは斜体で示す。レポートの下書きの変遷は太字で明記され、その内容に応じて、加筆、表記変え、言い換え、削除、挿入、新段落などの用語を用いてその実態に近づけた。その際に下線部を施したものはそれらの用語の適応範囲を示すために用いた。また筆者

²² これはレポート完成後の授業時間に組み入れられている活動である。その評価のポイントは1. 作品のオリジナリティ 2. クラスの意見を十分に取入れたか 3. 動機・仮説、ディスカッション、結論の流れに一貫性があるかで他者のみならず自己のレポートも評価する。この評価権は活動の担い手の主人公である学習者に委ねられ、教室運営担当者はこの権利を有しない。

²³ 情報収集の一手段としてPCで「年少者日本語教育」を検索してみると2002年9月20日現在、YAHOO 検索、GOOGLE 検索でそれぞれ106件ヒットする。因みに「問題発見解決学習」ではそれぞれ19件、34件である。

²⁴ 竹田・西（1998 p.2-4）では「哲学は、何を問うのか？」に答え「それはひとことで言えば「生それ自身についての問い」である。その問いが「レトリカルなもの（形だけの難問）になってその難問を解いたり、考えたりすることこそ哲学であるという奇妙な考え方を生むと、哲学はダラクする。」と明言し、暗に哲学がご大層な学問に祭り上げられ、人間にとっての本質的な問いである必然性に着目されない世間の一般的傾向を批判している。

があとの考察を導くための自己相対化に関連する検証部分の記述には二重下線を施した。)

レポート下書き提出日：4月26日，5月10日，5月31日，6月21日，6月28日
最終原稿提出日：7月6日 となっているが，今回は5月31日の下書き表示したものに6月21日で変遷した個所について付記する。また検証過程を分り易くするために下書き部を から に分節しそれぞれの節での分析・検証を表示し結論で総括的に考察する。

2 - 3 . 5月31日から6月21日へ

下書き

加筆1

私は3歳のヘリと5歳のマリという娘二人を連れて日本に留学している母だ。私は早稲田大学と子供たちの幼稚園が始まる4月から非常に忙しくなった。今から15年間ずっと作らなければならない弁当作りも始まった。お弁当の中身は何にするかを考えると頭が痛くなる。朝6時に動かない体にムチを入れて起き上がる。私と子供の弁当を3個詰めながら私の一日は始まる。7時頃から子供たちと格闘しながら起こしてもちゃんと目を覚ますのは7時半。朝ご飯は食べる時間がない。8時10分に家を出て，バスを乗換えて幼稚園に着くのが8時半ころ。月曜日と水曜日は私がバスから降りる時間がないのでバスに乗ったまま子供たちに「行ってらっしゃい」と言う。自分は降りずに，急いで子供たちを降りさせる私をバスの中の人々は不思議に見ている。そんなときバスを降りているヘリ，突然，振り返って言った。「ママ，チュウ。」「ヘリ，急いで？皆私たちを見ているよ。後でね？ 表記変え(→。)」と言うと，その大きな目に涙を浮かべて降りない。仕方なくキスするとすぐに笑顔になって降りる。バスの一番後ろの窓に行くと見ると，子供たちはバスに降りたまま私が見えなくなるまで手を振る。その時が私の一日の中で一番忙しいと同時に切なくなる瞬間だ。早稲田に着くともう9時になる。言い換え(→なっている)

私の 言い換え(→私が，)授業が終わったあといそいで家に帰ると，ほかの人が連れて帰った子供たちと，洗濯やご飯やお風呂などが私を待っている。あっという間に子供たちが寝る午後9時になる。私がマリとヘリの真ん中に横たわって絵本を読んであげないと子供たちは寝ない。私は指も動かさなくなるほど疲れてたびたびうた

たねする。しかしまだ宿題がたくさんある。

加筆 1

- ・ 子供とは何か
- ・ 個人の選択
- ・ 私と子供

5月31日の下書きから一変して6月21日の下書きには上記のような目次が施された。そして5月31日の分はこの目次の に組み入れられた。それは表題の「子供とは何か」を説明するもので、クラス活動ではテーマの「○○と私」の「○○は私にとって××だ」という動機のまとめとなるものでここでは「仮説」と我々は呼んでいたものの提示部分に相当する。

この目次の挿入とその題目設定は注目に値する。目次をつけることは教室運営担当者からのアドバイスがクラス全体に対してなされたかどうかは授業記録からはうかがえない。しかし6月15日の2限で学習者の一人B君がディスカッションの報告をしたときにその書き方を担当者から評価されており²⁵、B君のレポート下書きに目次が明記されていたことをPは意識したと考えられる。しかし、その目次の表記は他の多くの学習者もしたような、1．動機と仮説 2．ディスカッション 3．結論 というものではなく、Pは独自の表題をつけることでそのオリジナリティーの一端を披露したものと考えられる。

表記変え（？→。）

言い換え（なる→なっている）

言い換え（私の→私が、）

上記の3点に関しては、P自身の日本語の語感や文法感が形成されたものによると考えられる。何回も自分の原稿を読み、考え直していく過程でPは自分の言語感覚に合った表現を会得していったさまがこの下書きの変遷からうかがえる。「自己相対化」とは自分の言おうとしているその中身を繰り返し繰り返し推敲することで、一つの表現法や表記法を廻って練り直していく過程をもつことにもある。そこから「教師の考え」でない「私の考え」が導き出され「私の固有性」「私のオリジナリティー」が顔をのぞかせてくるのである。

²⁵ 授業記録の92ページで担当者は「あの、とてもよくできてます。こういうふうには書けばいいんじゃないかと思ます。特にいいところは、24歳の女性の紹介をしますね。どういう人で、なぜ、その人と話がうまく行くのかということを書いてありますね。これはとても重要なことです。（中略）じゃ、あとは結論を次にもってくればいいのか。はい。O.K.です。」とある。

下書き

私の生活様子を知っている日本人の親友は、「お母さんは本当に大変だね。それでかな、最近日本の女性は子供をあまり生みたがらないから西暦 3000 年になると日本人は一人になるかもしれないって。」と言われた。私は思った。その一人の日本人は多分老人だろう。科学技術の発達で作るクローン人間かもしれない。

なぜ現代人は出産を拒否するのか。私にとって出産と育児は特別な経験だ。もちろん私がしなければならぬ仕事がたくさんあって、私は疲れている。でも幸せだ。なぜならば子供と私がお互いに愛しているし、必要としているからだ。いつか私の頭が痛くてマリの小さい膝を枕にして横たわっていたときがあった。初めはいたずらをするつもりだったのが、本当に眠くなってきた。私の昼寝を邪魔したいと思うヘリを止めさせながらマリは言った。「ヘリ、止めて？ママは今休ませなければならないの。日本人は頭が悪くて韓国語を話せないから、ママが一生懸命勉強して日本語を話せるようになったでしょう？私たちのママは本当にすごいでしょう。」 **加筆 2** なんか静かだと思って目を **修正**（→目が） 覚めたら、マリは私に膝枕をしたまま私の上にかぶさるように眠って、**修正**（→眠っていて）ヘリはカーペットの上で遊び疲れて眠っていた。

私は子供と一緒に生きて行く中で本当の意味のおとなになったと思っている。出産する前、私は30歳になっても自分だけしか愛せないアダルト・チルドレンだった。生きていくために必要なことは就業や勉強さえすればすべて手に入るものだと思った。でもずっと愛を必要としていた。誰か、私のすべてを許し、限りなく愛してくれる人はいないのかと、心はいつも砂漠の中で助けを求めている。その反面愛することは難しい。自分が求める強さと同じほどには、相手に与えることはできないのだ。結婚当初はその私の願望が叶うと思ったが、30年くらい違う環境に育ってきた二人の大人は、ひとつになれなかった。それは最初から無理だった。

しかし、子供は間違った。 **修正**（→違った）妊娠したとき、私は私の中に命を感じた。その生命体は私と一緒に呼吸しながら生きていた。私たちはひとつだった。子供はサボテンと同じく私の体から生成して世の中に自分の根をおろして命を守って行く。それはミラクルだった。

加筆 2 ……

この時間の経過を示す記号は効果的にこの下書きに働いている。これは何度か書き直

している際にPの回想が鮮明に蘇って、より事実に則した表現を努めようとしている表れかもしれない。Pはこの記述によって子供たちと自分との関係を反芻しているようでもある。エピソードが次に挿入されるのは加筆3の部分であるが、より伝えることばをめざしてのPの伝えたい思いがエピソードの数々に散りばめられている。

修正 (目を→目が)

修正 (眠って→眠っていて)

修正 (間違った→違った)

これらの間違いはいわゆる文法的なミスと称されるもので、Pは自らの気づきで自己修正を図ったものとみられる。書きたいものを記述化すること、そして徹底してその文字化された文章にこだわって読みすすめ思考を続けることはクラスでの活動に触発されるものである。他者に向かって伝わる「私のことば」を發し、相手の反応を感知しながらその「私のことば」を振り返り吟味していく過程からは、日本語教育の分野で「教師の役割の一つである」と考えられがちな「訂正すること」は学習者自らが担うということが読み取れよう。さらに「教師による訂正」が効率的に言語習得をするための必須項目であるという根拠なき一般通念への異義申し立て²⁶としてこの活動は意味があるものと筆者は考える。

下書き

出産後、子供は私が望む以上の愛をくれた。 **加筆3 (新段落で以下を始める)** 子供たちの愛をもらいながら私も愛することを学ぶようになった。"愛された事のない人は、人を愛することができない"という言葉の本当の意味も分かるようになった。自分自身ではなく、人や自然や環境や人生など回りのすべてを愛することができた。人と人の距離ではなく、人と環境、人と生の距離も狭めることができるようになった。なぜなら、私がいつか亡くなくても、その自然と環境は私の子供たちが生きていくところであり、その人々は私の子供たちと付き合い一緒に生を喜ぶ人たちだからだ。子供は私に生命の大切さだけでなく、労働の重要さも教えてくれた。労働は必ずよい結果をもたらす。私は子供のお手本なので一生懸命生きていかなければならない。子供たちが朝起きてはじめて言うことばは何か皆に 言い換え(皆に→

²⁶ 細川(2002)では「正しい日本語」「日本語らしさ」という表現を用いて議論されている。

皆さんに)わかるだろうか。それは「ママ」だ。私はそれほどかけがえのない存在なのだ。

加筆3

以前マリは食事の途中自分と部屋にラーメンをこぼしたことがあった。その前日もヘリが鍋をこぼしたので私は腹が立った。カーペットについた、ラーメンのつゆの染みを取りながら私はマリの不注意を叱った。「ママ、本当にごめんなさい・・・」彼女は痛ましく私の許しを求めながら激しく泣いた。片付け終わって私はマリの太股が赤くなっていることに気が付いた。マリは火傷してしまっていたのだ。「痛い?」「ああ、ちょっと・・・でも、大丈夫。ごめんなさい。私のことを嫌いにならないで?」なぜ私に謝っているのか? マリはママを困らせてごめんなさいと、泣きながら言った。心が張り裂けそうになった。私は母親として未熟だと感じた。

このエピソードの挿入はその直前の「出産後、子供は私が望む以上の愛をくれた。」の具体例としてなされたものであろう。ここにPの求めて止まなかった「愛」の形が提示されているのであろう。そしてPの母親として必死にその責務を果たす覚悟が「私は母親として未熟だと感じた。」と素直な自己省察となって吐露されている。ここにおいてPは子供にべったりの情の深い母親から自分をきちっと見つめられる自律した個としてのPという存在を発見したのではないかと筆者には思われた。それは最初のバスの中で繰り返されるいつもの光景でのどこにでもある、しかしちょっと涙もろい母子関係とは違って、このエピソードは自律する母を通して子供も自律するというその相関関係を見事に映し出したものだからである。

ある人間関係の出来事を振り返ることから、人は相手だけでなく己が何者であるかの自覚と気づきに導かれることを暗示するようなPのエピソード挿入であり、その挿入は他者に己の思いや気持ちをよりよく知らせると同時にそれは己自身への鏡となって己を映し出すことになるのである。これまた「自己相対化」の中身と言えよう。

新段落

Pの下書きの変遷を追っているとここに新段落で始められる「子供たちの愛をもらいながら私も愛することを学ぶようになった。」という書き出しが、Pの最初から言いたかったことのひとつだと納得させられる。ここの表現は4月26日の最初の下書きからずっと書き残されている「私は子供と一緒に生きて行く中で本当の意味のおとなになった」

と思っている。」の実態を示すものがここまでにいくつかのエピソードで示されているからである。Pがこの一番言いたいことを探し当てるのは5月10日の2回目の下書き²⁷においてで、それには2週間ほどを要したが、それはまだ表層のものであったろう。Pはテーマである「子供」がPにとって何であるかを明文化することには躊躇していて仮説という形ではできていないからである。ここまで書き込んだこの6月21日の下書きの時点でP自身には「子供は私にとって本当に愛するとはどういうことを学ばせてくれるものである。」と「～である」の形で言い切ることは簡単ではなかったであろうか。Pはそれに踏み切っていない。仮説の明示はなされなくとも新段落の初めに「子供たちの愛をもらいながら私も愛することを学ぶようになった。」と「～学ぶようになったと思う」ではなく言い切ったことで自他ともにそれを知らしめたという自負があったのであろうか。これは6月22日の授業での話し合いで明らかになり6月28日の下書きで明示されるのであるが、この新段落の登場で動機のまとめとしての仮説はほぼ浮かびあがったと考えられる。P自身の思考の変容ともいえるべき思考回路の深まりと整理を経て、手垢のついた表現ながら、Pがその表現（「子供たちの愛をもらいながら私も愛する事を学ぶようになった。」）を生むまでのプロセスを丁寧に描写することで「愛」の実相を見事に描きだしたのである。それは取りも直さずPの変容をも保証する「自己相対化」の試みから導き出されたものと言える。

言い換え（皆に→皆さんに）

この言い換えは己を赤裸々に語るPの面目躍如の感のある部分である。Pが最初の動機と仮説にあたる部分を仕上げつつあるということから、後はディスカッションの報告を丹念にまとめていけば漸く自分の本当に書きたいことの正体は明らかされるという感触を持ち始めたのがこの頃と言えるであろう。それはこのクラス活動とは別に筆者が個人的にPと話し合う機会を持ったとき（6月22日）の感想からしか導きだせないが、Pは自分の状況にいつも不安を抱きながらもその不安を冷静に見つめる一つ的手段

²⁷ なぜ現代人は出産を拒否するのか。私にとって出産と育児は特別な経験だ。もちろん私がしなければならない仕事がたくさんあって、私は疲れている。でも幸せた。なぜならば子供と私がお互いに愛しているし、必要としているからだ。私は子供と一緒に生きて行く中で本当の意味のおとなになったと思っている。出産する前、私は30歳になっても自分だけしか愛せないアダルト・チルドレンだった。生きていくために必要なことは就業や勉強さえすればすべて手に入るものだと思った。でもずっと愛を必要としていた。誰か、私のすべてを許し、限りなく愛してくれる人はいないのかと、心はいつも砂漠の中で助けを求めている。その反面愛することは難しい。自分が求める強さと同じほどには、相手に与えることはできないのだ。私は痛切に愛される事を望んだ。しかし、出産後、子供は私が望む以上の愛をくれた。子供たちの愛をもらいながら私も愛することを学ぶようになった。"愛された事のない人は、人を愛することができない"という言葉の本当の意味も分かるようになった。

としてこのクラス活動での「子供と私」のレポート執筆を捉えることができた判断されるからだ。ここの言い換えは語り調をとることで、Pの伝えたい思いをオブラートに包み隠すことなく表現することを許してもらえる相手としてクラスメンバーを信頼し始めたと考えられる。自分の非常にプライベートな部分を描きだしながらも、Pは世の中のマイノリティーと世間一般が称する己の状況をさらけ出すことでも悲劇のヒロインを演じ世の注目を浴びるという俗っぽい自己不安の解消を図ることでもなく、自分としっかり向き合うことを子供との関係を通じて会得しつつある人間的成長を遂げつつあることをそのことばの端々にうかがわせ、筆者に共感をもたらす自律した一人の個としての存在を明らかにしていったからである。

下書き

大幅加筆 4

・個人の選択

世界の人口動向を見ると、少子化が予想をはるかに超える速さで進行している。家庭や地域や社会で子供の数が減少し続け、1999年にはついに史上初めて未成年者の人口が高齢者の人口を下回った。この推移だと日本の総人口は2050年には二割減の9200万人、2100年には六割減の5100万人と100年もたたないうちに半減してしまう。少子化と高年齢化が重なり、未成年の人口比率は激減、逆に高年齢層の人口比率は急増しており、2016年頃には前者の人口は後者の人口の半分になるものと見込みまれている。こうした少子化は現に人々の生活に様々な影響を及ぼしており、最終的には将来の人々の生活様式や国の形態そのものにまで大きな問題を持ち込むはずだ。

私は3人になぜ現代人は出産を拒否するのかについてインタビューをした。皆と話しながら少子化の原因と影響を考えてみたかった。一人息子がいる32歳のオーストラリア人既婚男性公務員Hさん、ドイツから留学している20歳の未婚女性Cさん、早稲田大学に在籍している20代の日本人未婚男性Mさんだった。

まずHさんは、「人間は豊かになれば子供をつくらなくなり、人口が減っていく」と言った。私は最初、Hさんの話は、子供の労働力が不必要な豊かな生活が少子化を加速しているという内容の話だと思った。でも、それは古典派の経済学者の考えで、この現象は人間社会だけの合理的ではない行動様式が原因ではないかと思った。動物は食糧が恵まれた豊かな環境にあれば子供をたくさん産んで個体数を増やす。逆の場合は個体数が減り、絶滅する。これは生態学的法則だし、大変合理的なので理

解できる。しかし、人間は動物だが動物世界の法則に反する。先進国の場合、人間は豊かになれば子供を作らなくなり人口を減らしていく。その反面、発展途上国の場合、人間は貧しければ子供をたくさん作り、人口が増える。この行動様式はすぐには理解できない。しかし、人間だけが損得勘定を考えながら行動している動物であることを認めれば謎が解けると思う。

次にCさんの答え。「独身で快適な生活ができるので出産をしない人が増えた。」これは人間だけの損得勘定の特性をくわしく説明している。紀元前1世紀のローマの指導者階級から少子化は始まったという。人は嫌なことを避け、利益になることをする。子供を作って育てることが自分にとってメリットなし、いやなこと、大変なこと、苦しいことが増えると思えば、子供を作るのをやめる。豊かな現代社会では女性も働いて所得を得ている。まず、子供をもつことは女性に負担になり、自己実現することと結婚することを両立するのは難しい。さらにお金がかかりすぎて子供は持てないと言う。もちろん、こんな判断をして子供を作るか作らないかを決める権限は、いまはもっぱら女性にある。それでは、女性に結婚、出産、育児に対する否定的なイメージを持たせるのは何か？私は男性中心の社会構造だと思う。女性にとって育児と自己実現の両立はとても難しいのが充分にわかっているはずの社会の仕組みが、育児支援施設や制度の改善に対するふまじめな態度を変えようとしていない。それは男女とも男性中心社会への甘えが残っているからである。女性にも子供にも男性の協力は不可欠だ。男女共同参画社会や男女双方の意識の改善だけが結婚、出産、育児に対する否定的なイメージを削除するのだと思う。でもすべての改善をしたにもかかわらず、人間が自分の不合理性を克服しなければ、少子化は続いて行くはずだ。さらに、少子化が進行していったら、どうなるだろう。

Mさんはその少子化の影響について指摘した。「現行の年金や健康保険制度が立ち行かなくなることを心配する不安」。その上、私は子供の数が少なくなると大人はその子供たちを過剰に保護して、子供の自立性や、社会性を減退させるかもしれないと思った。

私を含め、子供を生むか生まないか、いつ何人生むかは個人の選択の問題であると思っている。しかし先のインタビューの内容を無視しても、子供をつくった人々には、そして私には私なりの考えがある。それは、Hさんの話に答えがある。「私のことをパパと呼んでくれる子供の面倒を見ながら、生きて行く理由がはっきり分かっていった。」私は子供たちこそ神様がくださった人生と言う謎を解くカギだと思う。子供の成長を通して、生成と消滅を何回も繰り返す自然法則の部分として自分を分

かることができたと思う。

1. 個人の選択の中身はディスカッション報告に当たるものである。Pはかなり自由な発想からディスカッションを最初の自分の疑問である「なぜ現代人は出産を拒否するのか。」を議論の論旨にしようとしていることがうかがえる。

→私は3人になぜ現代人は出産を拒否するのかについてインタビューをした。皆と話しながら少子化の原因と影響を考えてみたかった。

2. このクラス活動のディスカッションのやり方が把握されていないため(自分が立てた仮説を自分の意見としてその意見を廻って興味をもってくれそうな相手とそのことについて対話する。)Pはここで社会学の知見を引用してディスカッションに臨む。

→最初の段落での数値を引用しての統計的な記述部分。

3. Pは3人とのディスカッションというよりも自分の問題提起に対する相手の答えを引き出すことで、「なぜ現代人は出産を拒否するのか」の答えを一般論から導きだそうとしている。

→Hさんの答え「人間は豊かになれば子供をつくらなくなり、人口が減っていく。子供の労働力が不必要な豊かな生活が少子化を加速している。」→Pの考え「でも、それは古典派の経済学者の考えで、この現象は人間社会だけの合理的ではない行動様式が原因ではないかと思った。」→Pは次にCさんに問題をぶつけてみる。→Cさんは「独身で快適な生活ができるので出産をしない人が増えた。」と答え、Pは先ほどの自分の考えを確認する。→「これは人間だけの損得勘定の特性をくわしく説明している。」

さらにPはこの自論を展開し

「人は嫌なことを避け、利益になることをする。」とし、「子供をもつことは女性に負担になり、自己実現することと結婚することを両立するのは難しい。」と現実論を提示してみせる。そして女性にそんなイメージを与えるものを「私は男性中心の社会構造だと思う。」で総括している。→PはさらにMに対して少子化が進行していったらどうなるか問う。→Mは「現行の年金や健康保険制度が立ち行かなくなることを心配する不安」を指摘する。→Pはこれに加えて子育てでの大人の子供の扱いが過保護になることの懸念から子供の自立性や社会性が後退するするかもしれないと考える。

そしてPのディスカッションから導かれたとなるのであろう結論が

「私は子供たちこそ神様がくださった人生と言う謎を解くカギだと思う。子供の成長を

通して、生成と消滅を何回も繰り返す自然法則の部分として自分を分かってきたと思う。」となるようである。

以上それについて三点に分けて記述したこの加筆部分はPが他者の意見から触発された形はとっているものの、ディスカッション以前から持っている自分の考えを展開していく論調で終始しているため、ディスカッションが深まってその結果Pの思考に変容をもたらしたとは言いがたい。社会学的な知見で取り沙汰される一般的傾向の域をでない論調でオリジナリティーは乏しい内容である。従って「私のことばの肉化」からは程遠い。

下書き

大幅加筆5

・私と子供

人間は自分の人生のため、常に選択と決定をしなから生きて行く。「もうちょっと寝るか起きるか」や、「ラーメンを食べるかお弁当を買って食べるか」などの単純なことから「何をどういうふうにすれば人生に良いか」まで数え切れないほどの質問に答えながら毎日を過ごしている。私は私と子供たちのために最善だと思う留学と外国の生活を選んだ。それは私にとって最善の選択だったけれども最高の選択とは限らない。特に子供たちにとって最高の選択だったかどうかは本当に分からない。それだけではなく、子供を生んだのが子供たち自身のために良かったかも分からない。敢えて話えることと言えば私と子供たちは今幸せだと感じている実感だけだ。

35歳を過ぎ、子供2人を連れて、外国に来て、勉強なんかしたことがない言葉で5ページくらいの文章を書くのはとっても難しい。特に文字が10・5p程度の小さいときは最悪だ。でも、この授業を受けるのは私の、私たちのための選択だった。もちろんコストがかかりすぎる子供を育てるために仕事を探さなければならない。その仕事のためには、まず勉強をしなければならない。その勉強は日本語だと言う公式を作ったのも私だ。なぜそんな選択をしたのかと聞かれたら、子供と一緒に幸せに生きて行きたいからだと言いたい。そして子供たちといつか離れる準備をするためだと言いたい。インタビューが終わる頃、Hさんは質問した。「万一、子供たちがいなくなったらどうしますか。」分からない。自分がいままでしていたことの中で、一番満足したと思うことがなくなったらどうなるのだろう。もし、Hさんの信念のすべてが間違っていたらどうなるのだろう。死ぬほど苦しいはずだ。私も普通の親と変わらない親ばかりだ。でも将来、親が我が子の世話をやくのを止め、子供の

自主性に任せられるようになった時、子離れができない親にはなりたくない。私も親離れをしたからだ。子供が成長して親に依存した状態から独り立ちしやすいように、私も自立したいと思う。

今は夜中の2時、マリとヘリは私のそばで天使のような顔をして寝ている。いつもと同じように、マリとヘリの耳にささやく。「ママの子供になってくれてありがとう。本当に本当に愛している。」寝顔を見ながら、いつか私たちがこの文と一緒に読むことを想像してみる。子供たちは多分笑顔で、「えっ、こんなときが本当にあったの？もう、今のママとはぜんぜん違うじゃん。」と言うはずだ。 幸せだ。

この最終章は読む者を圧倒する力強さを持っている。それは何に起因するのか。 章の「子供とは何か」の問いに対する答えが 章の「個人の選択」というPの生きかたを振り返ることで肯定され、それはPの独断的なものの見方からのものでなく、3人のディスカッションの相手との話し合いによって導き出されたものであるという自覚と自信によって支えられている。Pは自分の生き方が子供にとっても自分にとっても最高の生き方とは言えないまでも最善だったとし、「敢えて話えることと言えば私と子供たちは今幸せだと感じている実感だけだ。」という堂々たる自己肯定をこのレポートに書くことで自分の何たるかを認識している。しかしこの二つの大幅加筆はまだクラスダイナミクスのプロセスと結実を如実に反映したものではない。Pの内に既に形成されている既存観念を主として記述しただけのものである。内容の濃いレポートとして評価されるためには、6月22日の授業での話し合いを受けて書き直す6月28日提出の原稿と更なるクラスからの異義申し立てを受けて生み出される最終原稿まで待たなければならない。

2 - 4 . 結論

以上、Pのレポートの下書きであるデータをもとにその記述の変遷からPが記述においてなした活動の内容となさなかった活動の内容を分析・検証してきた。その中身は具体的には二重下線を施したのでその検証の中核部分を再度示し、今度はそれらから「自己相対化」のプロセスを描きだしてみよう。

目次の表記は他の多くの学習者もしたような、1．動機と仮説 2．ディスカッション 3．結論 というものではなく、Pは独自の表題をつける

一つの表現法や表記法を廻って練り直していく

時間の経過を示す記号

自己修正を図った

エピソードの挿入

自己省察

相関関係を映し出した

書き残されている

明文化する

言い切った

プロセスを丁寧に描写する

語り調

ディスカッション報告

社会学の知見を引用

答えを一般論から導きだそうとしている。

現実論を提示

ディスカッション以前から持っている自分の考えを展開していく論調で終始

自己肯定をこのレポートに書く

クラスダイナミクスのプロセスと結実を如実に反映したものではない。

からはPにしか書けないものが創出される。ここにPのオリジナリティーを見出すことは容易である。しかしこのオリジナリティーは単に己を描くことによっても表出されよう。しかしPという固有名のある人がその人の経験から物申すからオリジナリティーがあるのだというような「問題発見解決学習」での相互自己評価の際にまま見受けられる「オリジナリティー」の誤解を払拭するためには、でPがしたような他者とのディスカッションの報告がの形をとって丹念に記述化されなければならない。その記述をもとにPは極力を排したところででの知見を活用してを反芻しながらという抽象的な活動を行う。そこからの形をとったが強固になる。それは実際にはやと言う形でレポートの核を形成していく。その際に記述行為でのに見られる精神作用が働けば他者との信頼関係とか伝えたい思いが募っているものと推測されよう。これはが高まれば高まるほど伝えたいことの伝わり度は増し、結果はこれまたを表明したと理解できる記述に表れる。(これは最初の仮説への確信が強化されることにつながる)この活動を十分に成し遂げるとはでのクラスダイナミクスがレポ

ートに表れるものでその独自のプロセスがレポートの「オリジナリティー」を高めるということになる。

今回のデータ分析からはあまり顕著に出てこないものの学習者の固定観念とも称される問題があるが、この件については6月28日づけの次のレポート下書きから に関する記述が見事に削除されており、それは6月22日の授業でのクラスダイナミクスがPとクラスのメンバーとの信頼関係を育んだ結果によるものと窺える。

この一連の活動とその活動内容の記述化が「自己相対化」という概念の中身である。そしてその自己相対化のプロセスはこの学習で実践される。その実践の一応の完成であるレポート完成時に実践者は自己肯定を示す実践者自らが生み出したことばで「結論」を記述するのである。そこには自己相対化のプロセスの段階段階を誠実に踏みしめてきた者だけが得られる「私はこれこれの者である」「私にとっての生きがいはこれこれである。」「私はこれこれのために今を生きている。」と他者に向かってのみならず自己に向かって堂々と宣言できる「アイデンティティー」を表明する力を得るのである。このプロセスこそが「私のことばの肉化」なのである。

．おわりに

日本語教育における「問題発見解決学習」はそこで実践される自己相対化のプロセスがそのエッセンスである。日本語習得の達成はPの完成レポートからだけでも明らかであるが、今回の筆者の分析を経ることでその達成度は一層明らかにされたであろう。日本語教育の目標は、ことばの使い手の「思考」と「表現」の活性化にあり、その中身である「私のことばの肉化」が実現されたかは自己相対化のプロセスを詳らかにすることでしかその達成のほどを確認することはできないと筆者は考える。なぜならそのプロセスを経た人間の思考の実際を文字化して記録として我々の目の前に提示するという実体化が伴わない限り、人は「私のアイデンティティー」などという茫洋として掴み所のないものを確認することはできないからである。

「自己相対化」ということば自体は別段目新しくも斬新でもない。しかしそこに付加される意味づけは、自己相対化のプロセスの実際を記述化することでそのことばはことばとしての力を注がれ、その使い手はそのことばによって自己を認識し得るということにある。この小論で筆者はPという人物が他者の支援を得ながら自己相対化のプロセスを丹念に辿ることでPのアイデンティティーを発見したことを論証した。しかしそこで

Pは固定したアイデンティティーを会得したのではなく、この先、他者との信頼できる関係性の中から幾度となくそのアイデンティティーを修正していくことが約束されたのである。それはP自身が自己認識のための自己相対化のプロセスを取りながら、他者との時には共感、時には葛藤や確執を交えながらそのつど自分が最善とする生きかたを選択していく力を育んでいることに気づき感じとることで明らかにされる。その力への直観観取は充足感であり快適感であり自分だけにしかできない自分の生き方を相対的に認識することで十分達成されよう。

参考文献

- 竹田青嗣 2001 『言語的思考へ』 径書房
細川英雄 2002 『日本語教育は何をめざすか 言語文化活動の理論と実践』 明石書店
竹田青嗣・西研 編 1998 『はじめての哲学史 強く深く考えるために』 有斐閣アルマ